

業務改善報告書



件名	介護のICT化に向けた取組		法人名	社会福祉法人観寿々会
			報告者名	前川大輔
1 提案概要				
介護記録の電子化、コミュニケーションツール、介護ロボットの導入により職員の負担軽減を図る。				
2 現状と問題点(改善前)				
①洲原ほ一むでは介護職員による記録記載の残業が発生していました。具体的には令和2年3月の記録による残業が介護部だけで1110分となっていました。この残業が毎月のように発生しており介護部全体で負担となっていました。その為、記録による残業削減が急務となっていました。 ②施設内の連絡手段として内線電話が部署毎に1台、PHSが2～3台あったが、タイムリーな申し送りをする際に歩き回って相手を探す手間があった。 ③排泄介助は1名で立位がとれない利用者は紙オムツ使用又は2名でトイレ誘導実施となっており、紙オムツ使用は排泄の尊厳が損なわれる、2名トイレ誘導は職員の負担増大があり腰痛発生リスクが高まっていた。 ④ベッドからの転倒、怪我が続いている、見守り必要者の居室へ頻回に訪室しており手間となっている。				
3 具体的改善方法				
①紙媒体の介護記録から電子化へ移行するにあたり、事前に記録入力方法の伝達を各部署役職者に行った。説明書においても部署内で閲覧できるようにし、不明点があればいつでも確認できるよう環境を整えた。 ②インカムを施設内で24台導入し全職種が装着するよう振分けを行った。 ③移乗介助ロボット、ハグの活用を行い2名介助から1名で移乗する取り組みを行った。介護機器であることから事前に職員を対象に説明会を行い、使用に慣れて頂いた。利用者にも事前にアセスメント、トレーニングを計画的に行った。 ④見守り介護ロボット、アアムスを導入する為に事前に業者から指導を仰ぎ、その内容を職員に伝えた。5月には再度業者に来所して頂き、使用にあたり不明点を確認したり、活用方法の指導、助言を頂いた。				
4 改善の効果(改善後)				
①記録の残業時間が令和2年3月介護部全体で1110分であった。電子化移行の半年後は46%減の521分へ短縮された。 ②伝えたい内容が離れた場所でも一斉に伝わる、緊急時の連絡もインカムで情報交換が出来、相手を探す手間が省けた事と、部署間のヘルプ等の連携もしやすい環境となった。タイムリーな申し送りができるようになり、申し送り、ミーティング時間の短縮削減ができた。 ③移乗ロボットハグの活用は理解力のある利用者限定されてしまうが立位保持が難しい方でも職員が抱えることなくハグの力で移乗を行い、職員は拭き取りとズボン上げ下げのみとなり腰痛予防と排泄の尊厳保持に繋がった。尿取りパッドの汚染も格段に減り、経費削減に繋がっている。 ④見守り介護ロボットにカメラがついており、タブレットと連動している為、離れた場所でもセンサー反応時に状態を確認できるようになり、訪室回数の減少に繋がった。インカムも導入している為、離れた場所から指示も出せる事が出来、少ない職員数の時間帯でも迅速に対応できる環境下となった。				
(経済効果がある場合は下記を記入してください。)				
経費節減	36,500	円/年	左記数字の算出根拠	
収入増加		円/年	①電子化移行時に法人内でQC活動を行った際の記録から算出。1か月あたり589分の削減×12か月＝7068分 ②1日の介護、看護の申し送り10分×朝・夕2回×2フロア＝40分/1日あたりの削減時間×365日＝14,600分削減 ③50円のパッドを1日3回交換していたが1回へ減った為、計算し算出 トイレ誘導人員2名から1名に削減(職員1名 1回あたりの誘導介助時間5分、1日あたりの回数3回＝15分＝5,475分削減 ④見守りカメラ使用者2名×(1日あたりの平均居室訪問回数10回、1回あたりの平均訪問時間3分)＝21,900分削減 ①+②+③+④＝49,043分削減	
時間短縮	817	時間/年		
(採点基準) ※自動計算	1670500円			
5 所感				
開設後30年以上経過している施設ではあるが、新しい機器の導入を行う為に介護機器委員会を立ち上げたり、生産性向上委員会を立ち上げる等、職員の創意工夫で業務改善を行ってきた。その都度説明が必要ではあるものの全てにおいて効果は出てきている。定期的の実施方法の見直し、更なる活用方法の模索を行い、業務改善、生産性の向上に努めていきたい。1つの業務改善で多大な効果を得る事は難しい為、今後も新たな機器の導入を積極的に行い、業務改善に努めて行きたい。				